

吹田市

吹田操車場遺跡 9

吹田（信）基盤整備工事（墓地造成工事）に伴う吹田操車場遺跡発掘調査報告書

2013年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター

吹田市

吹田操車場遺跡 9

吹田（信）基盤整備工事（墓地造成工事）に伴う吹田操車場遺跡発掘調査報告書

序 文

吹田操車場遺跡は大正・昭和年間に操業した、当時東洋一と称された吹田操車場を中心に広がる遺跡です。公益財団法人大阪府文化財センターでは平成10年度から当遺跡の調査を行ってまいりました。今回は平成25年5月に行った発掘調査についての報告です。

当地は千里丘陵の縁辺部にあたり、南側の大阪平野へ緩やかに傾斜する低地部に位置しています。また、淀川の支流である安威川・神崎川の右岸にも近く、古代の主要道であった三島路も近辺を通っていたと推定されることから、古くから水陸交通の要衝であり、様々な物資が行き交っていたであろうことが容易に想像できます。さらに、近隣には古墳時代の須恵器を生産した吹田須恵器窯跡群や難波宮や平安宮の宮殿の瓦を焼成したことで有名な七尾瓦窯跡、吉志部瓦窯跡が存在し、古墳時代から古代にかけて窯業が盛んであったことでも知られています。

吹田操車場遺跡では、これらの焼物の原材料を採取した跡と目される古墳時代、古代の粘土採掘坑、七尾瓦窯、奈良・平安時代の集落跡、鎌倉時代の建物跡、木棺墓や、吉志部瓦窯産出の瓦をはじめ、須恵器、土師器、瓦質製品を主とした皿・碗・釜等の日常雑器、中国から伝来した白磁・青磁碗等、旧石器時代以降の様々な遺構・遺物が発見されております。

今回の調査では中世以降の耕作地や池状の落ち込みが検出され、主に農耕に関する成果を得ることができましたが、今後これらの調査成果が地域文化の復元に寄与し、文化財に対する意識をより高めてくれることを希望します。

最後になりましたが、発掘調査及び遺物整理事業の実施にあたり、多大な協力を賜りました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社、大阪府教育委員会、吹田市教育委員会をはじめ、関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 田 邊 征 夫

例 言

1. 本書は大阪府吹田市芝田町地先に所在する吹田操車場遺跡の発掘調査報告書である。本調査は公益財団法人大阪府文化財センターが管理する調査番号では吹田操車場遺跡 13 - 1 にあたる。
2. 調査は、吹田（信）基盤整備工事（墓地造成工事）に伴う吹田操車場遺跡発掘調査 13 として、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 国鉄清算事業西日本支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は平成 25（2013）年 5 月 1 日～5 月 31 日の間に行った。遺物整理作業は平成 25（2013）年 6 月 1 日～6 月 28 日の間に行い、平成 25（2013）年 9 月 30 日に本書の刊行をもって完了した。
3. 調査及び整理作業は以下の体制で実施した。
事務局次長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史 調査課長 岡戸哲紀
調査第二課長補佐 市本芳三 副主査 岡本圭司
4. 遺物写真撮影は調査課専門調査員 片山彰一が行った。
5. 発掘調査及び整理作業の過程で以下の諸氏ならびに機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
西本安秀・増田真木（吹田市教育委員会）、岡本敏行（大阪府教育委員会）
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社吹田事務所
6. 吹田操車場遺跡 13 - 1 における航空測量の委託契約名称は「吹田操車場遺跡（墓地造成）発掘調査に伴う航空測量」である。
7. 本書の執筆・編集は岡本圭司が担当した。
8. 本書に関わる写真・実測図などの記録類は公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管しており、広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）で表示し、単位はmである。
3. 調査区全体図及び遺構実測図の方位は座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、公益財団法人大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006 年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構は、アラビア数字を用いて通し番号で名称を付けており、アラビア数字の後ろに遺構の形態・種類を表す文字を付している。例) 8溝 10 落ち込み
7. 遺構番号は調査時に付した番号をそのまま用いている。したがって報告書中の本文・遺構挿図・遺構写真中の遺構番号は、調査時に作成した遺構図面、遺物ラベル、写真・遺物・図面台帳に記されている遺構番号と同一である。
8. 遺構の断面図・平面図は、対象により適宜縮尺を変え掲載しており、図ごとにスケールバーと縮尺を表示している。
9. 遺物実測図の縮尺は 4 分の 1 であり、図中にスケールバーと縮尺を表示している。
10. 掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
11. 遺跡分布図や調査位置図で用いた地図については、個々の挿図に地図の出典を記している。
12. 遺物の年代に関しては以下を参照した。

中世土器研究会編 1998 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 『年代のものさし』 - 陶器の須恵器 -

本文目次

第1章 調査に至る経緯と方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	2
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	5
第3章 調査成果	7
第1節 基本層序	7
第2節 調査の成果	7
第4章 まとめ	14

挿図目次

図1 調査地の位置	1
図2 調査区位置図	2
図3 地区割図	3
図4 調査地と周辺の遺跡	4
図5 調査区と既往の調査位置図	6
図6 調査区壁断面図	8
図7 調査区第1面全体図	9
図8 調査区第1面（8溝、9土坑）全体図	10
図9 調査区第2面全体図	12
図10 出土遺物実測図	13

写真図版目次

写真図版1 第1面（1）

1. 第1面全景（北東から）
2. 第1面全景（南西から）

写真図版2 第1面（2）

1. 第1面北東部（西から）
2. 第1面1溝断面（南東から）
3. 第1面4（右）・5・6溝断面（南東から）

写真図版3 第1面（3）・第2面（1）

1. 第1面土層観察用畦部（北西から）
2. 第1面8溝、9土坑（東から）
3. 第2面全景（上が北西）

写真図版4 第2面(2)

1. 第2面全景(北東から)
2. 第2面北東部(西から)
3. 第2面15(左)～18溝断面(北西から)

写真図版5 第2面(3)

1. 第2面土層観察用畦部(北東から)
2. 第2面土層観察用畦部(南西から)
3. 第2面22・23(右)ピット、24溝(西から)

写真図版6 壁断面、出土遺物

1. 第2面南東壁面(北西から)
2. 第2面南西壁面(北東から)
3. 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と方法

第1節 調査に至る経緯と経過

吹田操車場遺跡は大阪府吹田市片山町・芝田町と岸部中町地内に所在し、JR吹田操車場跡地を中心に広がる遺跡で、これまで旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されている。当遺跡は、昭和42（1967）年に吹田市教育委員会による調査にて中世の遺物が確認されたことが最初である。

平成10（1998）年には、日本国有鉄道清算事業団近畿支社が計画したJR梅田貨物駅の機能移転計画に伴い、移転先である吹田操車場跡地内において61箇所及ぶ遺跡確認調査が大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センター（現、公益財団法人大阪府文化財センター、以下当センターと略す。）により行われた結果、事業予定地内全域で旧石器時代から中世にわたる幅広い年代の遺物が出土し、遺構が良好に残存していることが判明した。以後、この調査結果を受けて、当センターでは、大阪府教育委員会の指導のもと、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が行う事業予定地内において発掘調査を随時実施している。

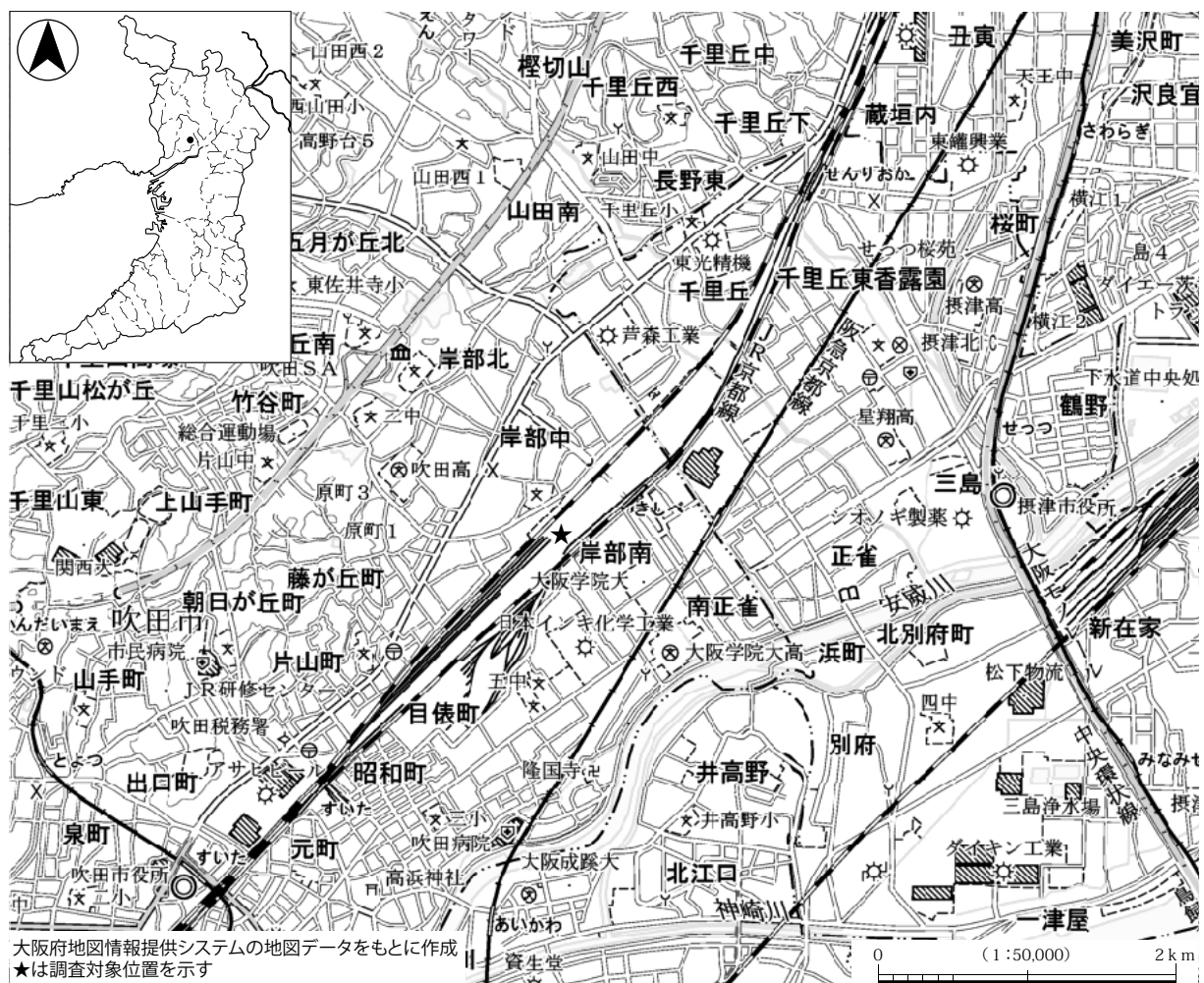


図1 調査地の位置

本書に記載する吹田操車場遺跡の発掘調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構による吹田操車場跡地土地区画整理事業区域内の2号街区公園に接して計画されている墓地造成工事に伴って実施したものである。調査地は大阪府吹田市芝田町地内に位置し、調査面積は37㎡である(図1・2)。

調査にさきだって当センターでは、平成25年4月23日に独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社との間で「吹田(信)基盤整備工事(墓地造成工事)に伴う吹田操車場遺跡発掘調査13」として受託契約を結んだ。発掘調査は大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、平成25年5月1日から5月28日まで行った。

調査の終了後、中部調査事務所(東大阪市長田東1丁目)にて整理作業を平成25年6月3日から6月28日まで行った。

第2節 調査の方法

発掘調査及び整理作業は、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010によった。

遺物の取り上げや写真撮影にあたっては、遺跡調査基本マニュアルに準拠した地区割を設定した。地区割は、国土座標軸(第Ⅵ座標系)を基準とし、Ⅰ～Ⅵの大小6段階の区画を設定したもので、大阪府内全域に共通する地区割である(図3)。第Ⅰ区画は大阪府の南西端 $X = -192,000\text{ m}$ ・ $Y = -88,000\text{ m}$ を起点に、府域を南北15(A～O)、東西9(0～8)区画に分割したもので、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を東西、南北各4分割の、計16区画(1～16)に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20(1～20)分割、南北15(A～O)分割する一辺100mの区画である。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画をさらに東西、南北ともに10(東西1～10、南北a～j)分割した一辺10mの区画である。なお今回の調査対象地はJ5-7-



図2 調査区位置図

4H-7cにあたる。取り上げた遺物には、この地区割名のほか調査区名・層位名・遺構名・出土年月日・登録番号等を記したラベルを添付した。遺物は、洗浄、注記を行った。写真・出土遺物は、台帳を作成し登録作業を行った。

調査にあたってはバックホーを用いて操車場造成土と近現代の耕作土層を取り除いた後、人力による掘削・精査を行い、遺構面及び遺構を検出した。

調査中は遺構や土層断面の写真撮影及び、断面・平面の図化・測量作業を随時行った。測量は、世界測地系に準拠する平面図直角座標系第VI系を基準とし、水準については、東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。また、最終遺構面（第2面）の測量には、ラフタークレーンによる空中写真測量を実施した。

現地で作成した実測図面は整理・編集し、Adobe社製IllustratorCS2を用いてデジタルトレースを行った後、編集し本報告書の版下とした。出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し実測作業を経て、ロットリングを用いて手描きトレースを行った後、編集し本報告書の版下とした。

調査で撮影した遺構面及び各遺構の写真については、台帳を作成したうえで本報告書に掲載するものを選別し、現像・焼付け作業を行い、写真図版用版下を作成した。遺物については、報告書に掲載するものを抽出し、中部調査事務所内のスタジオ・暗室にて撮影と焼付けを行い、遺構面・遺構の写真と同様、写真図版用版下を作成した。

以上の作業と並行して、報告書中の文書を作成し編集作業を行った。その後印刷会社との校正作業を経て、平成25年9月30日に本報告書を刊行した。また、編集作業の傍ら、FileMaker社製FileMaker Proを用いて遺構・遺物台帳を作成した。

最後に、報告書に掲載した出土遺物と掲載しなかった出土遺物を分別し、収納作業を行った。

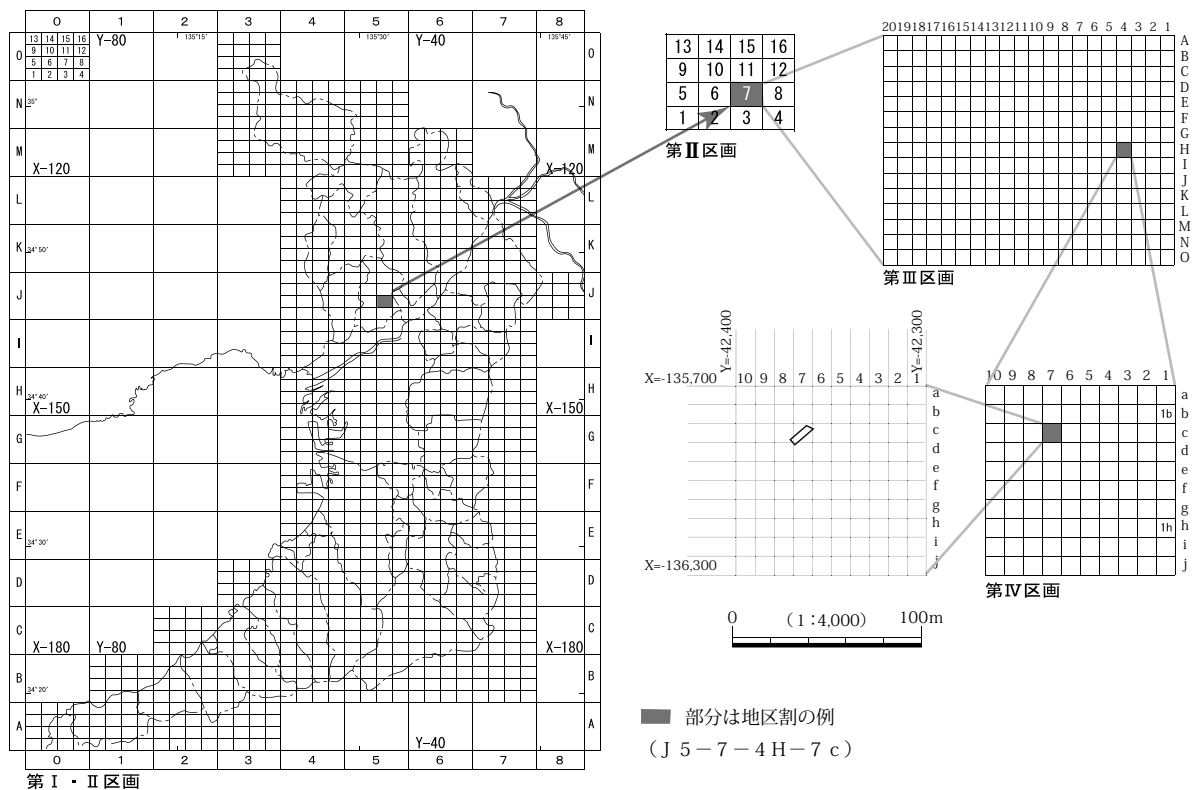
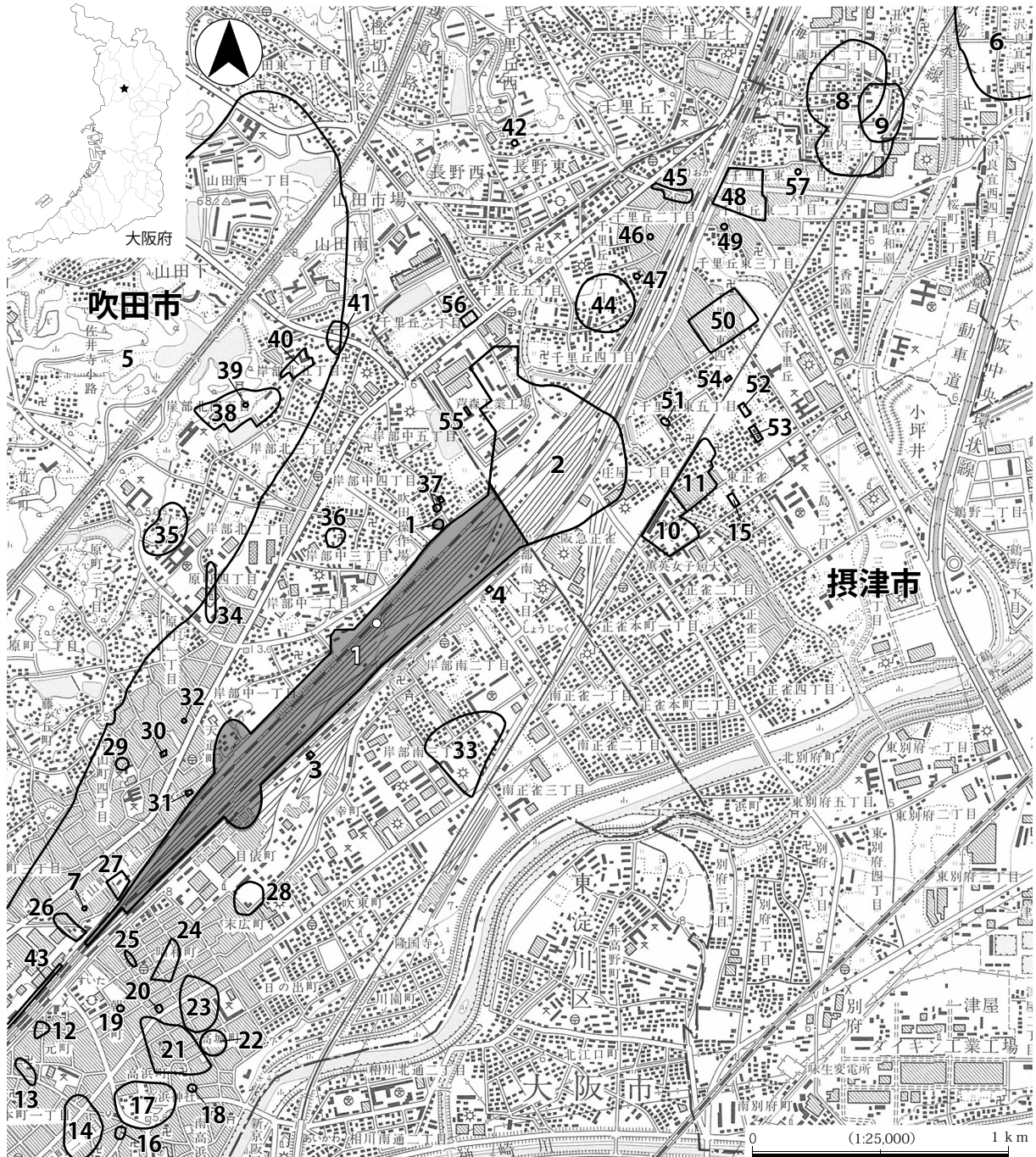


図3 地区割図



平成 12 年国土地理院発行 1/50,000 「大阪東北部」をベースに、大阪府地図情報提供システムの埋蔵文化財に基づき作成

- | | | | | |
|-----------------|---------------|-----------------|------------------|-------------------|
| 1. 吹田操車場遺跡 | 13. 浜の堂遺跡 | 25. 昭和町遺跡 B 地点 | 37. 岸部東遺跡 | 49. 千里丘東 3 丁目所在遺跡 |
| 2. 明和池遺跡 | 14. 都呂須遺跡 | 26. 片山遺跡 | 38. 吉志部瓦窯跡 | 50. 千里丘東 4 丁目遺跡 |
| 3. 吹田操車場遺跡 B 地点 | 15. 東正雀第 2 地点 | 27. 片山荒池遺跡 | 39. 吉志部 1 号墳 | 51. 庄屋 1 丁目所在遺跡 |
| 4. 吹田操車場遺跡 C 地点 | 16. 宮之前遺跡 | 28. 目俣遺跡 | 40. 七尾瓦窯跡 | 52. 庄屋 2 丁目所在遺跡 |
| 5. 吹田須恵器窯跡群 | 17. 高浜遺跡 | 29. 円塚古墳 | 41. 七尾東遺跡 | 53. 東正雀所在遺跡 |
| 6. 東奈良遺跡 | 18. 神境町遺跡 | 30. 片山芝田遺跡 | 42. 似禪寺山遺跡 | 54. 千里丘東 4 丁目所在遺跡 |
| 7. 片山前遺跡 | 19. 朝日町遺跡 | 31. 天道遺跡 | 43. 西の庄東遺跡 | 55. 千里丘 7 丁目所在遺跡 |
| 8. 常楽寺跡 | 20. 昭和町遺跡 | 32. 片山芝田遺跡 B 地点 | 44. 蜂前寺跡 | 56. 千里丘 6 丁目所在遺跡 |
| 9. 三宅城跡 | 21. 高城 B 遺跡 | 33. 中ノ坪遺跡 | 45. 千里丘遺跡 | 57. 千里丘東 1 丁目遺跡 |
| 10. 正雀 1 丁目遺跡 | 22. 吹田城跡推定地 | 34. 原東遺跡 | 46. 千里丘 2 丁目所在遺跡 | |
| 11. 東正雀遺跡 | 23. 高城遺跡 | 35. 吉志部遺跡 | 47. 千里丘 3 丁目所在遺跡 | |
| 12. 元町遺跡 | 24. 高畑遺跡 | 36. 岸部中遺跡 | 48. 千里丘東 2 丁目遺跡 | |
- 今回の調査区的位置

図 4 調査地と周辺の遺跡

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

吹田操車場遺跡は大阪層群の隆起により形成された千里丘陵の南縁部にあたり、淀川水系の河川によって運ばれた土砂の堆積により形成された沖積平野との境に立地する。

周辺の主要な遺跡については、既刊の当センター及び吹田市教育委員会の各報告書に詳しいため割愛し、ここでは吹田操車場遺跡の既往の調査についての概略を記述する。

吹田操車場遺跡は、昭和42（1967）年の操車場内の道路・水路整備工事に伴う事前調査で中世の遺物が出土したことから知られるようになった。

平成10（1998）年度にJR梅田貨物駅の機能の半分を吹田操車場跡地へと移管させる事業に伴い、遺跡の詳細を確認する為に61箇所の調査区を設定し、当センター（調査当時は（財）大阪府文化財調査研究センター）が発掘調査を実施した。操車場造成時の盛土を除去した結果、古墳時代以降の遺構面を検出し、旧石器時代以降の遺物が出土した。

平成12（2000）年には貨物駅舎と倉庫建設及び貨車区の改良工事に際して、A・B・C地区の調査を当センターが行った。A地区では古墳時代前期の直線的にのびる大溝、平安時代後期の掘立柱建物や条里地割に規制された水田を検出した。B地区は古代末から中世にかけて複数の遺構面を検出し、畦畔等の検出から耕作地が連綿と営まれていたことが明らかになっている。C地区で検出した谷地形では最下層の埋土から鬼界アカホヤ火山灰が検出され、谷地形の形成が7300年前以前にさかのぼることが明らかとなった。

平成13（2001）年には吹田市教育委員会によって、吹田市宮岸部中住宅建替工事に伴い試掘調査が8箇所で行われた。平成14（2002）年には調査区域が広げられ、谷と流路が検出された。出土遺物の多くは中世の遺物と弥生土器であった。特に東海系の弥生土器が比較的多く出土したことは刮目に値する。

平成18～19（2006～2007）年には信号場基盤整備工事に伴い、調整池造成予定地（C1・C2地区、C3・C4地区、C5・C6地区）の調査を当センターが実施した。C1・C2地区では古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にかけての粘土採掘跡と考えられる群集土坑と飛鳥・奈良時代及び平安時代の掘立柱建物を検出している。主な出土遺物に墨書土器、緑釉・灰釉陶器等がある。また、円面硯や七尾瓦窯産の後期難波宮所用軒丸瓦が土坑から出土したことで、瓦の選別地としての性格を看取している。

C3・C4地区、C5・C6地区では古墳時代の流路や中世～近世の耕作地を検出した。また、近世には堤を伴う池状の施設が造られている。なお、古墳時代の流路から山陰系の土師器がまとまって出土しており、先述の平成14（2002）年の吹田市教育委員会が行った調査で出土した東海系の弥生土器同様、地域間の交流を考える上で重要な資料といえる。

平成19（2007）年には吹田市教育委員会によって、操車場跡地内の街づくり用地の確認調査として59箇所の調査が行われている。その結果、谷状地形や古墳時代の大型土坑、飛鳥時代の建物跡、平安時代のピット等が確認されている。

平成19～20（2007～2008）年には信号場基盤整備工事に伴い、調整池造成地4箇所（C7～10）・防火水槽4箇所（B3～7）・導水路部分を当センターで調査を行っている。調査では弥生時代後期の土坑、古墳時代後期から飛鳥時代頃の溝や井戸、平安時代の集落を確認し、掘立柱建物や溝、井戸

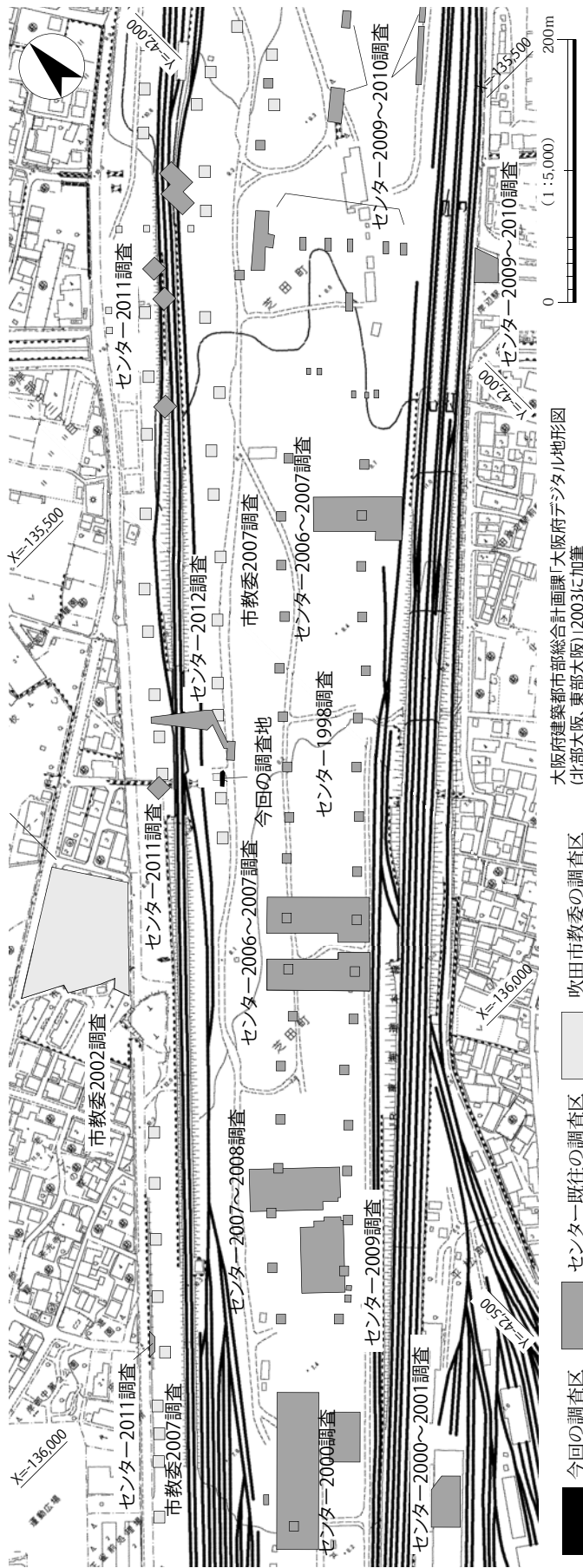


図5 調査区と既往の調査位置図

等を検出した。平成12(2000)年のA地区で検出した直線的にのびる大溝と同様な溝も検出している。また、中世に入ると広範に耕地が広がること became clear. Excavated artifacts include white phoenix era's plain lotus patterned round tiles, seven-tailed kiln's roof tiles, and Gishibu kiln's roof tiles, round tiles from Echigo kiln system, green glaze, and ash glaze pottery etc. Especially, the round tiles from Echigo kiln system are very rare in the Osaka area. It is a very valuable material.

平成21年度から23年度は当センターにより複数の調査が並行して行われた。

平成21~22(2009~2010)年にかけてはJR第二・第三職員通路部付け替えや南北自由通路、岸部駅駐車場部分の調査を実施した。調査では弥生時代後期の土坑、溝、古墳時代後期から飛鳥時代頃の群集土坑、平安時代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物や中世墓等を検出した。遺物は柱穴の根石に転用された陶棺片、白磁香合、中世墓より出土した白磁碗等が注目される。

平成21~23(2009~2011)年の調査では、遺跡の西部域である貨物専用道路部で、縄文時代早期の谷状地形や弥生時代中期の土坑、古墳時代の区画溝、井戸、古代末の木棺墓を検出している。また、中世以降には広範に耕作地が展開することを明らかにしている。

平成23(2011)年の汚染土壌撤去に伴う調査では、遺跡の南端部に先述のごとく当遺跡にて通有に検出される7世紀頃の群集土坑、縄文土器が出土した自然流路、古代以降の耕作地等を検出している。

平成24(2012)年の土地整理区画事業に伴う調査では、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物が検出されている。

第3章 調査成果

第1節 基本層序（図6／写真図版6－1・2）

調査区は幅約 3.5 m、長さ約 12.5 mを測り、ほぼ長方形を呈する。調査区の北東部は調査に着手する以前から攪乱を受けていた。調査着手前の現地盤の標高は、T.P.+8.4 m前後であった（以下の文章中では標高の T.P.+ を省略する）。なお基本層序名は現地表面直下の造成土層及び攪乱土層を第0層とし、以下、上から下へ第Ⅰ層、第Ⅱ層・・・と順番に層名を与えている。

第0層：現地表面から 1.5 m程の厚みを測る、近年の基盤整備工事及び旧吹田操車場建設に際して盛られたと考えられる造成土である。

第Ⅰ層：造成土直下で確認した旧吹田操車場建設以前の耕作土である。褐灰色細砂～シルトで代表される。当層を除去した段階で 1・2 溝等の第 1 面の遺構を検出している。なお、機械掘削にあたり、第 1 面の遺構を破損させないために、第Ⅰ層を若干意図的に残した部分もある。

第Ⅱ層：第Ⅰ層の直下に厚さ 0.05 m前後を測り、灰白色シルト混細砂層が調査区の北隅にて部分的に見られた。なお、当層を除去した部分に対し精査を行ったが、遺構は検出していない。遺物は土師器、瓦器、常滑焼、陶磁器、サヌカイトの各細片が出土している。

第Ⅲ層：厚さ 0.1 m前後を測り、灰白色・黄褐色細砂混シルト（マンガン斑を含む）に代表される。なお、現地調査における遺物採集の層名は茶褐色包含層である。当層を除去した段階で第 2 面の遺構を検出した。土師器、須恵器、瓦器、サヌカイトの各細片が出土している。

第Ⅳ層：上部は厚さ 0.2 m前後の灰白色・明黄褐色シルト混粗砂（マンガン斑を含む）に代表され、以下灰白色・黄褐色シルト混粗砂（マンガン斑を含む）と続き、さらに下方は 3 cm 大以下の砂礫～明緑灰色粗砂と黄色系の粗砂礫の互層となる。ラミナの発達が顕著であることから流水作用により形成された層と思われる。すべて無遺物層である。

第2節 調査の成果

検出面と遺構

第Ⅰ層下面を第 1 面、第Ⅲ層下面を第 2 面として調査を行った。

第1面（図7・8・10／写真図版1－1・2、2－1～3、3－1・2）

調査区北東半部で溝 9 条と土坑 1 基（7 土坑）を検出した（図7）。溝は幅 0.5 m前後、深さ 0.1 m程を測るやや幅の広い溝と幅 0.15 m前後、深さ 0.03 m前後を測る幅の狭い溝とに分類することができる。中央に幅の広い溝が 3 条（1～3 溝）、その両側にそれぞれ 3 条（4～6・12～14 溝）の幅の狭い溝が位置する。いずれの溝も 30° 程西に振り、南北方向に並行して走る。これらの溝や土坑から土師器、須恵器、瓦器の細片等が出土した。調査区の中央より南西半部は攪乱を受けていた。更に西側の 5・6 溝の直下で溝 1 条（8 溝）とそれに切られる土坑 1 基（9 土坑）を検出した（図8）。

1・2・3 溝，7 土坑：これらの溝は、ほぼ並行している。1・2 溝の間隔は 0.1 m～0.3 m、1・3 溝の間隔は 0.4 m～0.8 mを測り、いずれの溝も南側は調査区外へと伸びる。北端は 2 溝が調査区の中で収まるが、1・3 溝は調査区外へ続く。1・2・3 溝がそれぞれ長さ 3.3 m以上、2.25 m以上、

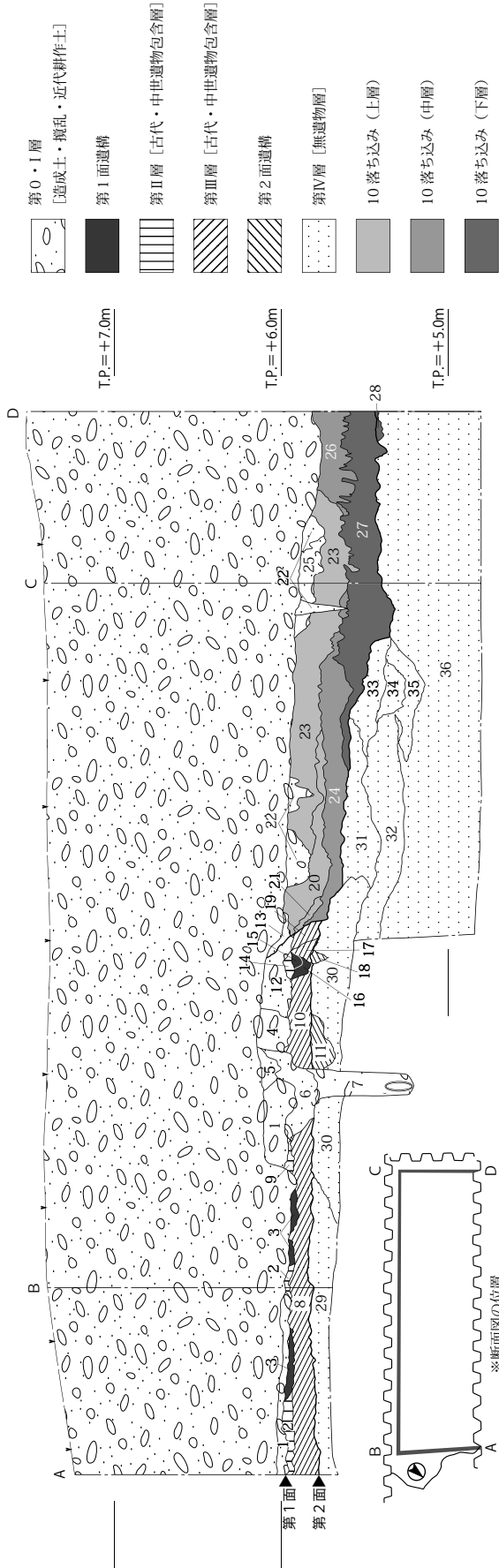
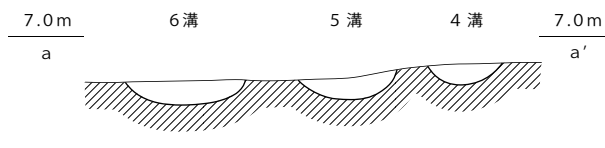
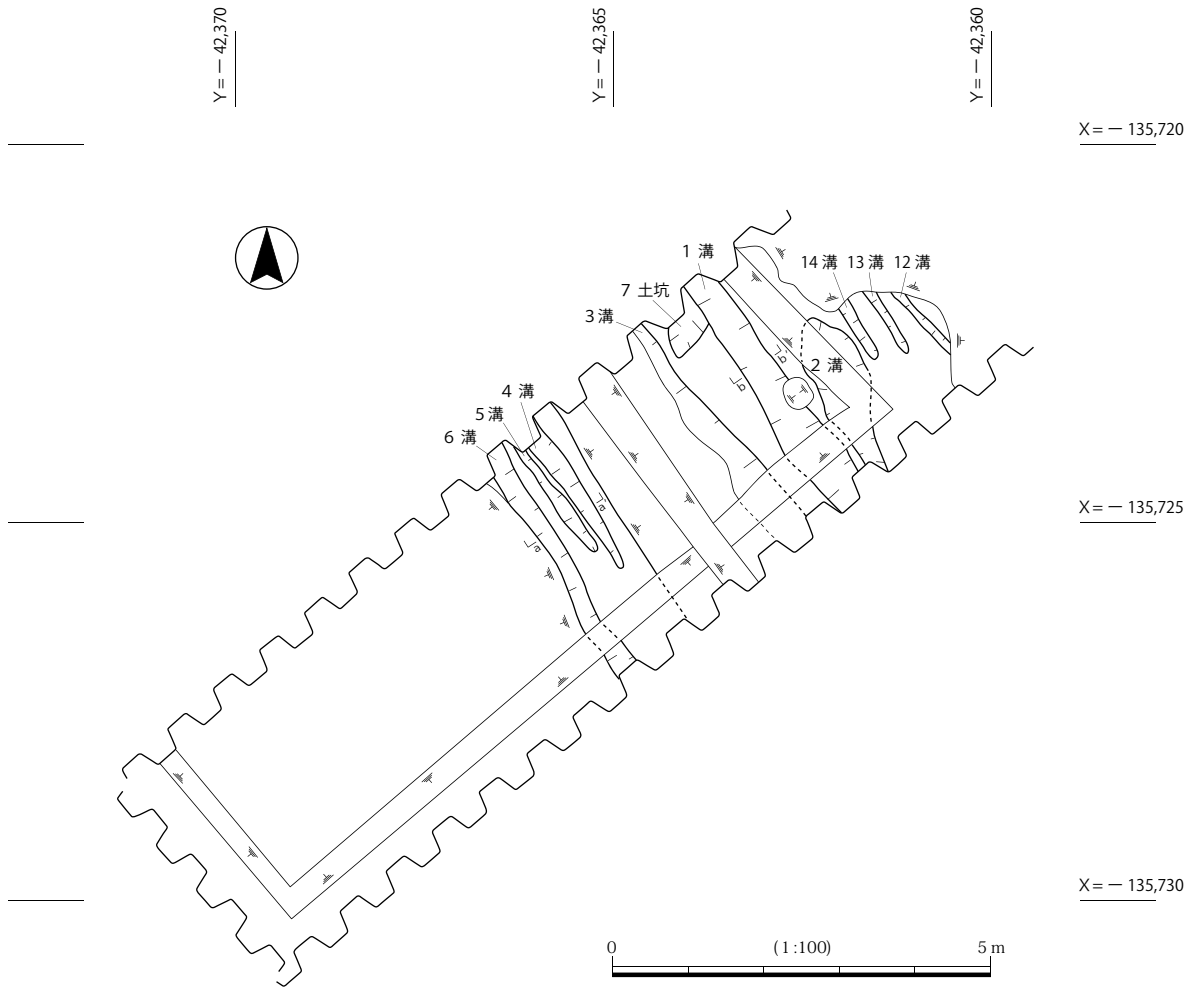
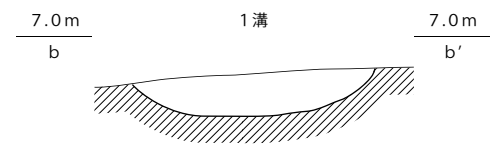


図6 調査区 壁断面図

1. 10YR4/1 褐灰 シルト 30%混細砂 (Fe 斑 5%含む) [旧耕作土]
2. 10YR7/1 灰白 シルト 10%混細砂 (Fe 斑 15%含む) [古代・中世遺物包含層]
3. 10YR5/2 灰黄褐 粗砂 20%混シルト (Fe 斑 3%含む) [1・2 溝埋土]
4. 10YR6/1 褐灰 粗砂 20%混シルト (Fe 斑 3%含む) [近代の溝]
5. 10YR4/1 褐灰 シルト 30%混細砂 (Fe 5%含む) に
10YR6/6 明黄褐 シルトをブロックで5%で含む [攪乱]
6. 10YR6/1 褐灰 1cm大の礫~粗砂 [埋設管攪乱]
7. 10YR4/1 褐灰 シルト 30%混細砂 (Fe 斑 5%含む) に
10Y5/1 灰 シルトをブロックで3%含む (Fe 斑 5%含む) [埋設管攪乱]
8. 10YR7/1 灰白・10YR5/3 にふい黄褐 (6:4) 細砂 40%混シルト (Mn 斑 20%含む) [古代・中世遺物包含層]
9. 3と近似 やや色調が暗い 10YR4/2 灰黄褐 [3 溝の埋土か]
10. 8と近似 やや黄色強い 7.5YR6/8 橙
11. 10と近似 粗砂の方が多くなる (6:4) (Mn 斑 30%含む) [11 溝埋土]
12. 10YR7/1 灰白 粗砂 20%混シルト (Fe 斑 3%含む) [旧耕作土=1 と同様と思われる]
13. 10YR6/6 明黄褐 シルトと 10YR6/1 褐灰 シルトの混合 [攪乱]
14. 10YR6/1 褐灰 シルト (Fe 斑 40%含む)
15. 10YR5/1 褐灰 シルト (Fe 斑 40%含む) [6 溝埋土]
16. 10YR5/1 褐灰 シルト (Fe 斑 40% Mn 斑 20%含む) [8 溝埋土]
17. 2.5Y5/1 灰褐 シルト 30%混細砂 (Fe 棒状斑 20%含む) に
2.5Y7/1 灰白 細砂が5%混じる (ラミナ見られる) [旧の 10 落ち込み埋土か]
18. 2.5Y5/1 黄褐 細砂 40%混シルト [22 ビット埋土]
19. 17と近似するがFeは含まない 2.5Y7/1 灰 細砂 (ラミナ5%含まれる) [旧の 10 落ち込み埋土か]
20. 2.5Y5/1 黄褐 1mm大の礫~シルト (粗砂が中心)
2.5Y7/1 灰白 (ラミナ見られる) [10 落ち込み上層]
21. 10YR5/1 黄褐 5cm大の礫~シルト (5cm大の礫 30%混じる) [10 落ち込み (上層)]
22. 5Y7/4 浅黄 シルトに5Y4/1 灰 シルトが5%混じる [攪乱]
23. 7.5Y4/1 灰 粗砂 5%混シルト (1cm大の礫 3%混じる) [10 落ち込み (上層)]
24. 21と近似するが粗砂が中心である [10 落ち込み (中層)]
25. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂 30%混シルト (1cm大の礫 3%混じる) [旧耕作土]
26. 2.5Y4/1 黄灰 シルト~粘土 (1:1) [10 落ち込み (中層)]
27. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト~粘土 (1:1) [10 落ち込み (下層)]
28. 5CY7/1 明緑 粗砂 [無遺物層]
29. 10YR6/8 明黄褐 10YR7/1 灰白シルト 40%混粗砂 (Mn 斑 20%含む) [無遺物層]
30. 10YR6/8 明黄褐 粗砂が多くなる 70%~90% [無遺物層]
31. 7.5Y6/1 灰 シルト~5cm大の礫がラミナで堆積 (5cm大の礫が中心) [無遺物層]
32. 2.5Y6/3 にふい黄 1cm大の礫~粗砂の互層 (ラミナ発達) [無遺物層]
33. 10YR6/2 灰黄褐 3cm大の礫~粗砂 (ラミナの一部) [無遺物層]
34. 10YR6/2 灰黄褐 0.5cm大の礫~粗砂 (ラミナの一部) [無遺物層]
35. 10YR7/2 にふい黄褐 0.5cm大の礫~粗砂 (ラミナの一部) [無遺物層]
36. 10CY7/1 明緑灰 粗砂~1cm大の礫がラミナで堆積
(5Y6/4 オリーブ黄 (Fe)か) [無遺物層]



4 溝・5 溝・6 溝 埋土:
10YR 6/1 褐灰 シルト混粗砂 (Fe 斑 10%混じる)



1 溝 埋土:
10YR 5/2 灰黄褐 粗砂 20%混シルト (Fe 斑 3%混じる)

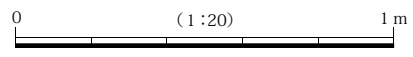
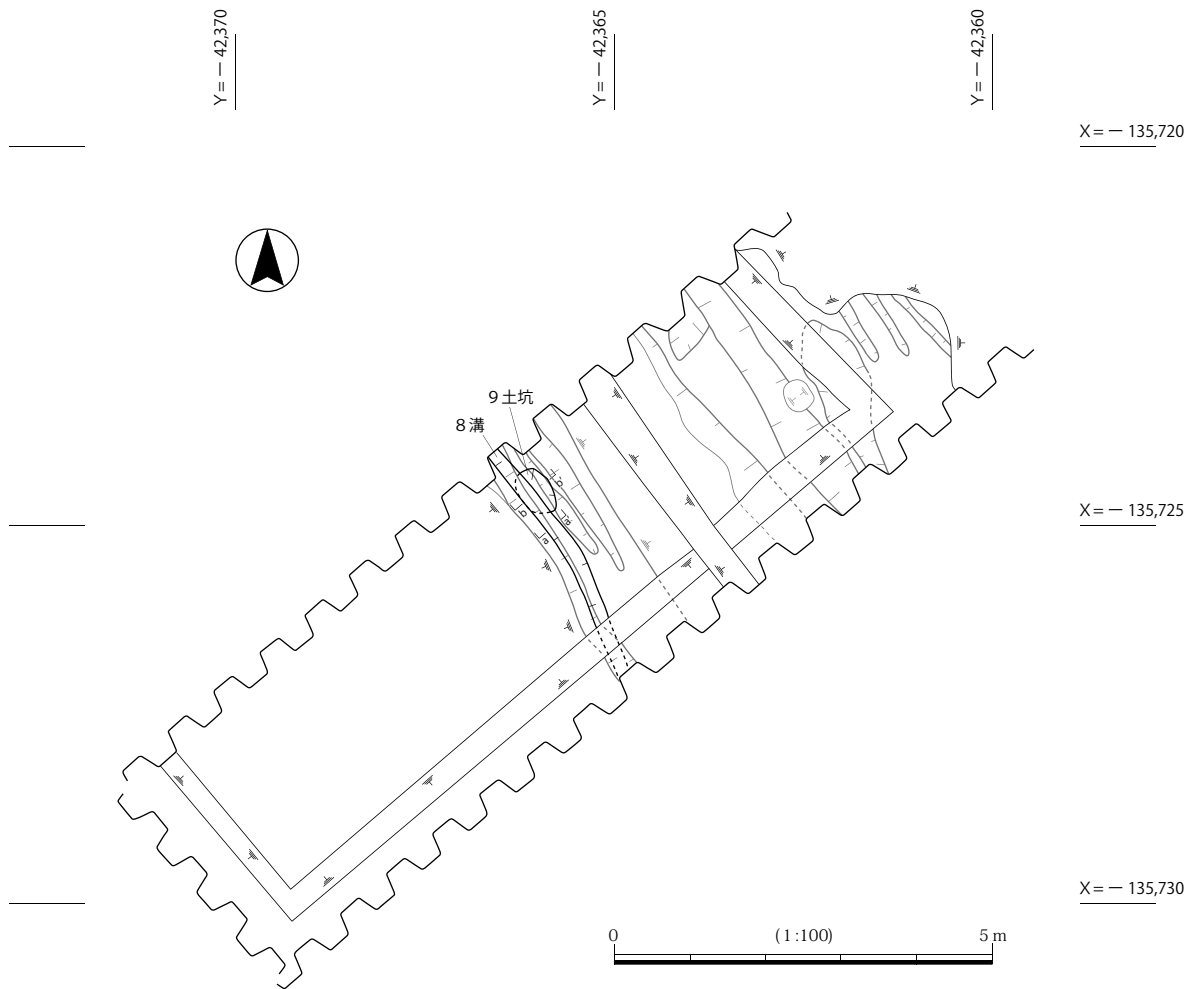
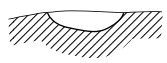


図7 調査区 第1面 全体図

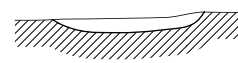


7.0m 8溝 7.0m
a a'



8溝 埋土：
10YR 5/1 褐灰 シルト
(Fe 斑 40%, Mn 斑 20%混じる)

7.0m 9土坑 7.0m
b b'



9土坑 埋土：
10YR 5/1 褐灰 シルト
(Fe 斑 40%, Mn 斑 20%, 粘土 5%混じる)

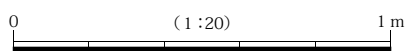


図8 調査区 第1面 (8溝、9土坑) 全体図

3.25 m以上であり、深さは共に0.1 m前後を測る。幅は1溝が0.45 m～0.55 m、2溝が0.3 m～0.7 mを測る。なお、3溝は西側の肩を後世の攪乱にて失っているが、遺構の形状を推定すると、幅0.5 m程度になると考えられる。埋土はいずれも10YR5/2 灰黄褐色シルトに粗砂が少し混じり、若干鉄分の斑紋が見られる単層である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、常滑焼の各細片が出土している。図10-4は瓦器塚の底部である。退化した高台が貼り付けられている。13世紀中頃の製品と思われる。7土坑は1溝に取り付く形となっている。埋土は5Y8/1 灰白色細砂とシルトが均等に混合したものにマンガン班を含む。長さ0.4 m以上、幅0.6 m、深さ0.11 mを測り、北西部は調査区外へ続く。遺物は出土していない。

4・5・6溝：いずれの溝も、互いに近接しながら並行して走り、北側は調査区外へと伸びる。4・5溝は調査区の中で収まるが、6溝は南側調査区外へ続く。埋土はいずれも10YR6/1 褐灰色シルト混粗砂に若干鉄分の斑紋が見られる単層である。幅は0.20 m～0.25 mを測る。遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦の各細片が出土している。

12・13・14溝：いずれの溝も、互いに近接しながら並行して走り、北側は攪乱により削平を受けている。13・14溝は調査区の中で収まるが、12溝は南側も削平されている。埋土はいずれもN7/0 灰白色細砂～シルトの単層である。幅は0.15 m前後、深さは0.04 m以下である。遺物は土師器、瓦器細片が出土している。

8溝、9土坑：8溝の形状は直上で検出した幅の狭い溝と良く似ている。直上の6溝と一部重なる形で同一方向に走る。南北方向共に調査区外へと伸びる。幅は0.20 m、深さ0.05 mを測る。遺物は土師器、黒色土器、瓦器塚の各細片が出土している。図10-8は瓦器塚である。復元口径は14.2cmを測る。全体に磨耗している。撫でて仕上げるが、口縁部は横撫でを施している。外面に指押さえ痕が残る。13世紀頃の製品と思われる。9土坑の平面形は楕円形を呈し、8溝に切られる。長軸0.65 m、短軸0.4 m、深さは0.13 mを測る。遺物は土師器、須恵器の細片が出土している。埋土は8溝、9土坑共に10YR5/1 褐灰色シルトに鉄分及びマンガンの斑紋を含む単層であるが、9土坑が若干粘土質である。

第2面（図9・10／写真図版3-3、4-1～3、5-1～3）

当面では調査区東半部、第1面で検出した幅の狭い溝と近似した形状を呈する溝8条（15～21・24溝）と中央部で溝1条（11溝）、ピット2基（22・23ピット）を検出した。これらの溝はいずれも第1面の溝と同様30°程西に振る形で南北方向に並行して走る。溝からは土師器、瓦器の細片が出土した。さらに、中央より南西半部では池状の落ち込み（10落ち込み）を検出した（図9）。

10落ち込み：当遺構は北西側の肩部以外は調査区外へ広がり、その全容は明らかでない。南北方向は3.2 m、東西方向は6.2 mの範囲を検出している。深さは0.5 mを測る。埋土は大きく3層に分けることができた。上層は7.5Y4 /1 灰色粗砂礫～シルト、中層は2.5Y4 /1 黄灰色シルト～粘土、下層は2.5Y5 /2 暗黄灰色シルト～粘土にそれぞれ代表される灰褐色系の土層であるが、相対的に下方ほど暗色となり、粘質である。中国製青磁碗、土師器皿、須恵器高坏、瓦器塚、瓦の破片等が出土している。遺構は第1面よりさらに上方から掘り込まれており、上・中層埋土は近代の遺物を含むが、下層埋土（図6-土層No.27）からは須恵器、瓦器など古代、中世の遺物しか出土していないことから、当遺構の遡源は中世であると考えられる。また、中層埋土と下層埋土との層境は大きく波打つように乱れており、地震等の流動性の強い作用により形成されたと考えられる（写真図版6-2）。図10-2、3は

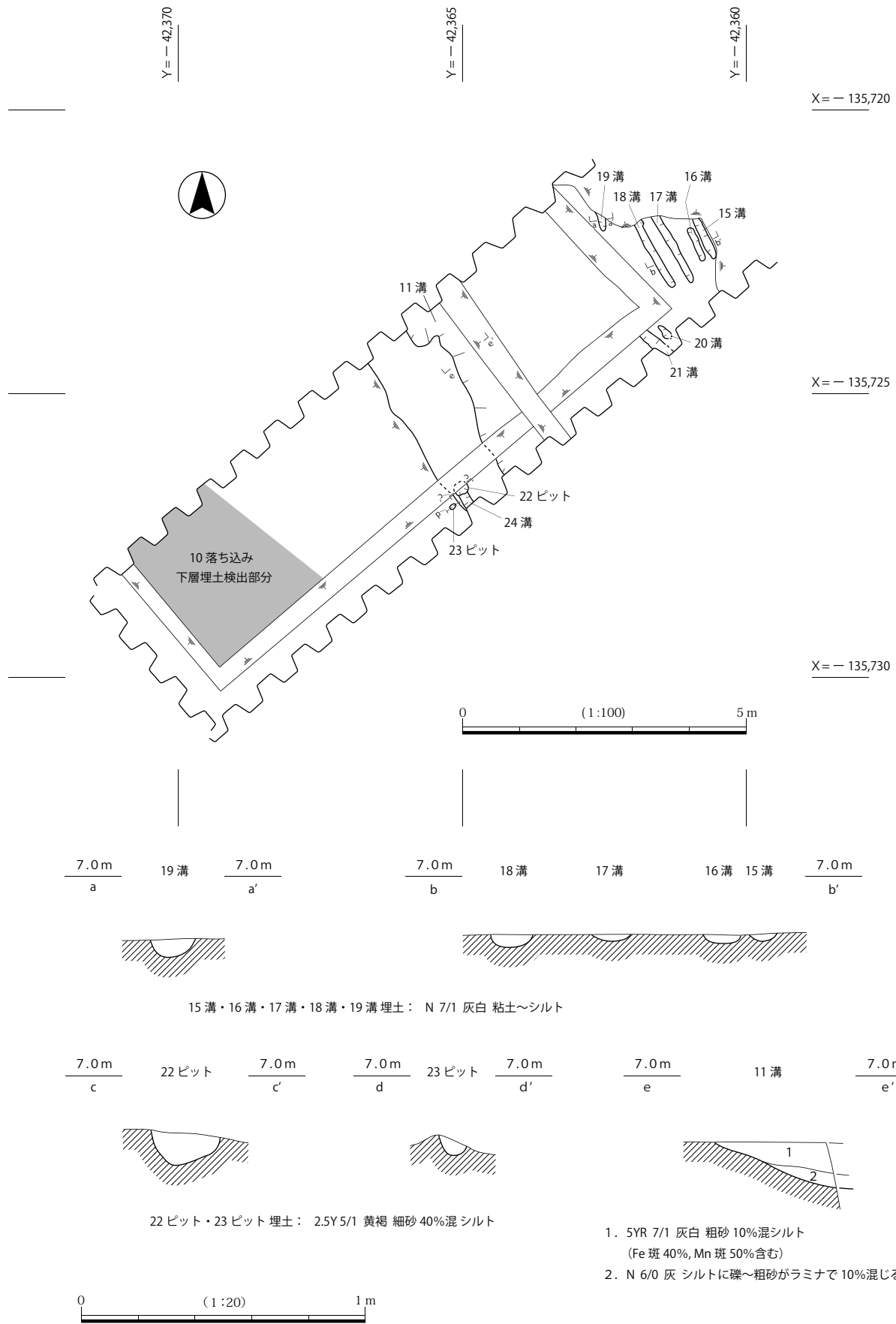


図9 調査区 第2面 全体図

中層埋土、図 10 - 9 ~ 13 は下層埋土から出土した遺物である。2 は備前焼鉢である。底部は未調整だが、ほかは回転撫でを施す。色調は赤褐色を呈し、胎土は 5 mm 以下の砂粒を含む。復元口径は 10.0 cm である。近世後半頃の建水であろうか。3 は中国龍泉窯系青磁碗である。外面には著しく退化した蓮弁紋が彫られ、残存部全体にオリーブ灰色の釉がかけられている。復元口径は 11.3 cm である。16 世紀頃の製品であろう。9 ~ 11 は須恵器である。9、10 は坏蓋である。9 の復元口径は 9.5 cm を測る。全体に回転撫でが施される。外面は灰がかぶっている。10 は宝珠状の摘みが付く。外面は灰がかぶっている。11 は高坏である。坏部と脚部が接合されていることがわかる。全体に回転撫でを施すが、坏部はさらに撫でが施されている。須恵器はいずれも飛鳥時代頃の製品である。12、13 は瓦器碗である。13 は復元口径が 14.6 cm を測る。撫でて仕上げるが、口縁部は横撫でを施している。内面に暗紋が見られる。焼成の際、重ね焼きをした痕が口縁部外面に見られる。13 世紀前半頃の製品と思われる。

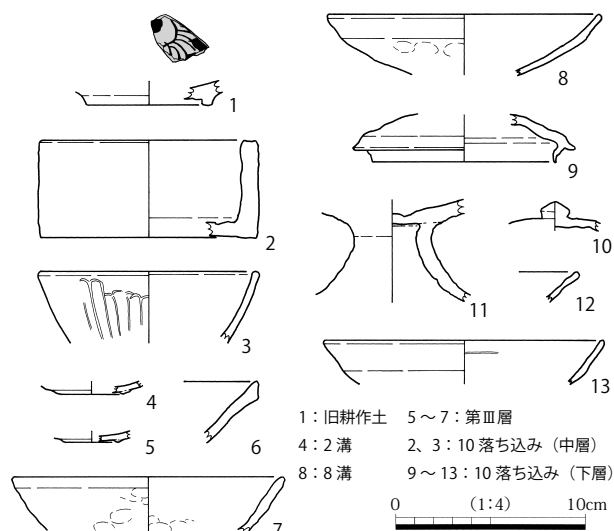


図 10 出土遺物実測図

外面は灰がかぶっている。10 は宝珠状の摘みが付く。外面は灰がかぶっている。11 は高坏である。坏部と脚部が接合されていることがわかる。全体に回転撫でを施すが、坏部はさらに撫でが施されている。須恵器はいずれも飛鳥時代頃の製品である。12、13 は瓦器碗である。13 は復元口径が 14.6 cm を測る。撫でて仕上げるが、口縁部は横撫でを施している。内面に暗紋が見られる。焼成の際、重ね焼きをした痕が口縁部外面に見られる。13 世紀前半頃の製品と思われる。

11 溝：南北方向共に調査区外へとのびる。長さ 3.3 m 以上、深さ 0.16 m 前後を測る。東側の肩を後世の攪乱にて失われているが、遺構の形状を推定すると、幅は 0.6 m ~ 1.1 m 程度になると考えられる。埋土は、南側では 10YR7/1 灰白色と 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂に多くのシルトが混じり、マンガンの斑紋が見られる。北側では上層は 10YR7/1 灰白色粗砂混シルトに鉄分及びマンガンの斑紋を含み、下層は N 6/0 灰色シルトに粗砂がラミナ状で入る。遺物は土師器と須恵器の細片が出土している。

15 ~ 21 溝：15 ~ 19 溝は、互いに近接しながら並行して走り、北側は攪乱により削平を受けている。南側は調査区内で収まる。埋土はいずれも N 7/0 灰白色シルト ~ 粘土の単層である。幅は 0.15 m 前後、深さは 0.03 m 前後である。20・21 溝も埋土は 15 ~ 19 溝と近似しており、同様の性格を持った溝の痕跡と考えられる。20 溝から土師器片が出土している。

24 溝：22 ピットに切られる。南側は調査区外へとのびる。長さ 0.3 m 以上、幅 0.15 m、深さ 0.05 m を測る。埋土は下記の 22 ピットと近似する。

22・23 ピット：調査区中央東端で検出した。22 ピットは直径 0.25 m、深さ 0.12 m を測る。10 落ち込み上層埋土を除去した段階で検出している。23 ピットは直径 0.1 m、深さ 0.06 m を測る。埋土はいずれも 2.5 Y 5/1 黄褐色細砂が多く混じるシルトである。

包含層出土遺物

図 10 - 1 は第 I 層から出土した中国漳州窯系青花皿である。畳付けには砂目痕が残る。見込みには花紋が呉須にて描かれている。16 世紀末 ~ 17 世紀前半頃の製品と思われる。

図 10 - 5 ~ 7 は第 III 層から出土している。5 は瓦器碗底部である。退化した高台が貼り付けられている。13 世紀中頃と思われる。6 は東播系須恵器練鉢である。13 世紀初頭の製品か。7 は土師器褐色系の碗である。復元口径は 14.0 cm を測る。撫でが施されるが、内外面に指押さえの跡が弱く残る。

第4章 まとめ

古代以前

今回は古代以前の遺構は検出されなかったが、Ⅱ層、Ⅲ層共にサヌカイトの小破片が出土している。また、Ⅱ層、Ⅲ層及び各遺構から中世段階の遺物を伴うが、須恵器高坏・坏蓋・甕等の飛鳥時代頃の遺物も出土しており、近隣に当該する時期の遺構がある可能性も考えられる。

中世及び中世以降

近接する調査区では、遺構がほとんど検出されていなかったが、今回2面の遺構面とそれらに伴う溝、土坑、ピット、落ち込みを検出することができた。両遺構面で検出した溝は30°程西に振りながら南北方向にのびるものが多く、これらは歴史地理学的見地から当地周辺に展開する嶋下郡南部の条里地割⁽¹⁾がN-33°-Wをとるとの考えと合致する。溝の形状も大きく2つに分けられるが、既往の調査⁽²⁾を鑑みると、幅の狭い溝は鋤溝、やや幅広の溝は畝間溝もしくは用水に供された溝と見ることができよう。土坑を含め、いずれも耕作に係る遺構である。これらの遺構から出土した遺物は古代、中世前半代に帰属するが、いずれも細片であることや、既往の調査において旧耕作土層下で検出された耕作に関連する溝は中世後半から近世段階に比定されており、今回検出した遺構も中世後半から近世になる可能性もある。

第2面下の無遺物土層は下方に向かうにつれ、漸次的にシルト質から砂質及び礫質に移行し、ラミナが顕著に見られる。これは流水の営力を受け堆積したことを示すものであり、千里丘陵の縁辺部である当地域に鳥足状に展開していた開析谷が埋まる段階で形成された堆積と思われる⁽³⁾。

以上、今回の調査で、近隣の調査地とは若干様相が異なり、中世ないし近世以降に耕作地として利用されていたことが判った。また、これらの耕作の方向が、当地周辺に現存する条里地割に影響を受けていることも判り大きな成果を挙げることができた。

(1) 当地周辺域の条里地割は服部昌之氏による復元があり、これを元に当センター既刊の報告書でも図示されている(服部 1983、(財)大阪府文化財調査研究センター 2001、(財)大阪府文化財センター 2011-1)。

(2) これらは吹田操車場遺跡では通有に見られる溝群である。例えば、当遺跡南西端に当たる吹田操車場遺跡 07-1-09-1の調査では低位部を中心にN-33°-Wの方向をとる中世後半や近世段階の鋤溝が顕著に検出されている((財)大阪府文化財センター 2010・2011-2)。また、これらに付随する形で小さな池状の溜りが数基検出されているが、今回検出した落ち込み遺構はこれらと同様な性格を持つ可能性がある。

(3) 今回の調査区から南西に100m離れた平成18・19(2006・2007)年度の調査では、当地にかつて存在した開析谷が3世紀から18世紀にかけて埋没していく過程を明らかにしている((財)大阪府文化財センター 2008)。

[引用文献]

服部昌之 1983『律令国家の歴史地理学的研究』—古代の空間構造— 大明堂

(財)大阪府文化財調査研究センター 2001『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第66集

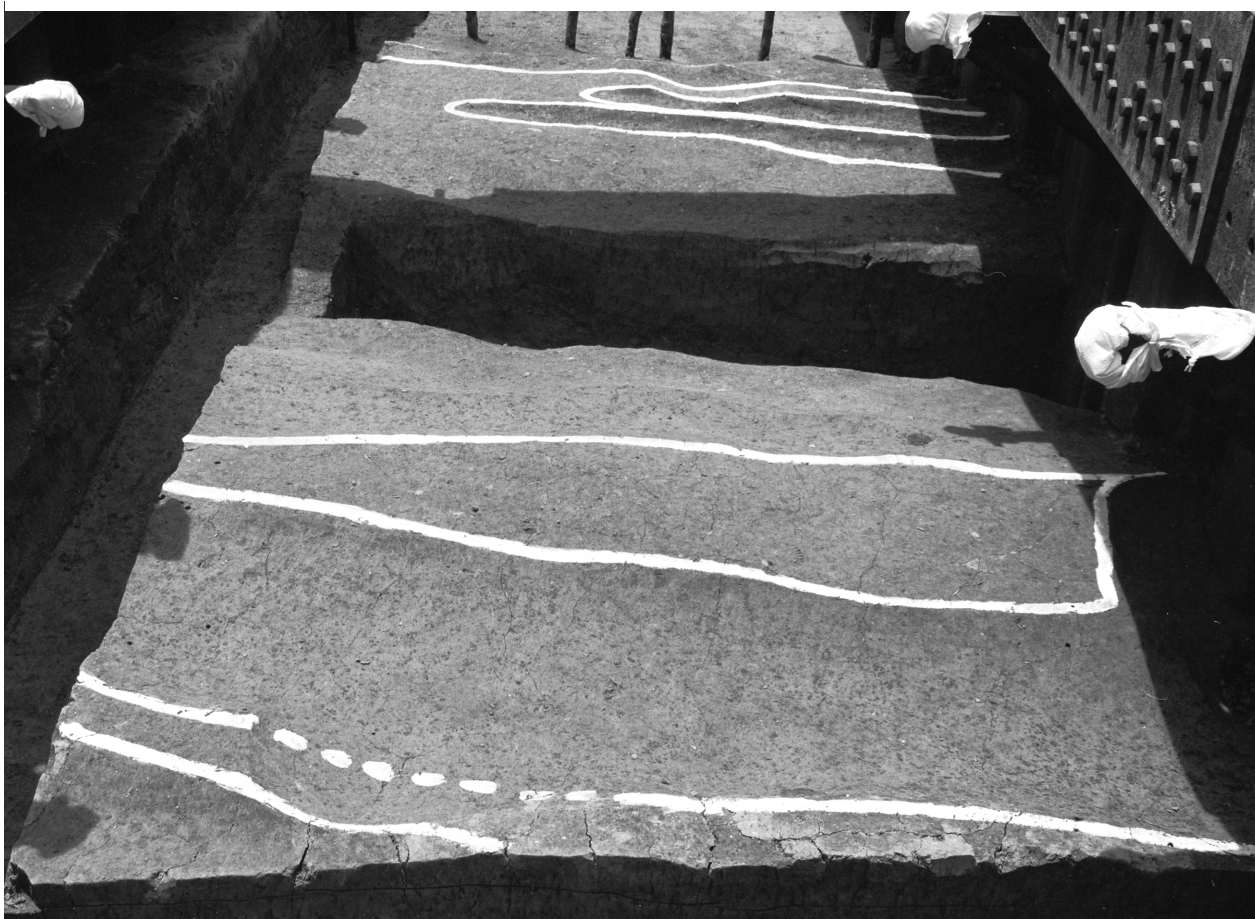
(財)大阪府文化財センター 2008『吹田操車場遺跡』Ⅲ (財)大阪府文化財センター調査報告書第180集

(財)大阪府文化財センター 2010『吹田操車場遺跡』Ⅳ (財)大阪府文化財センター調査報告書第201集

(財)大阪府文化財センター 2011-1『吹田操車場遺跡』Ⅵ (財)大阪府文化財センター調査報告書第217集

(財)大阪府文化財センター 2011-2『吹田操車場遺跡』Ⅶ (財)大阪府文化財センター調査報告書第220集

写真図版



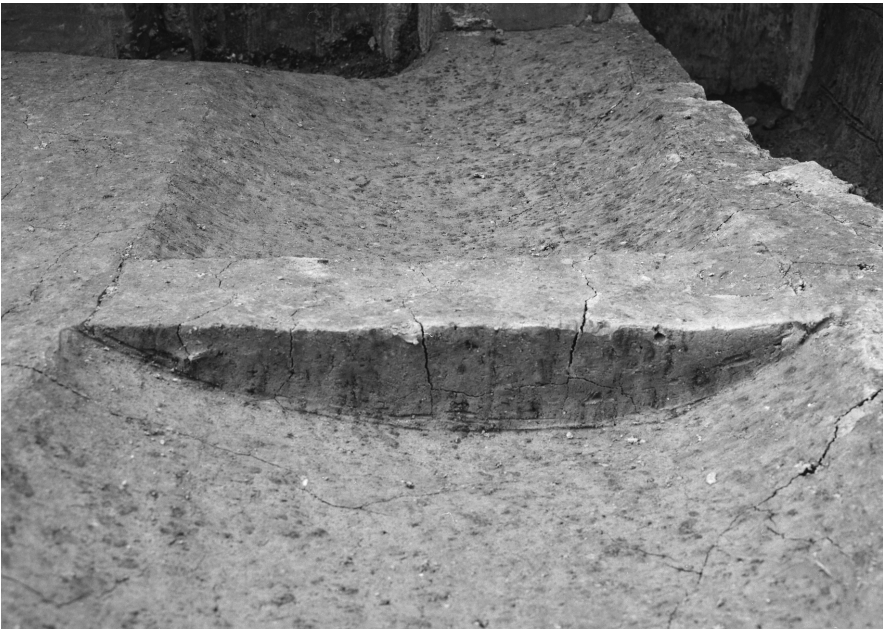
1. 第1面全景(北東から)



2. 第1面全景(南西から)



1. 第1面北東部
(西から)



2. 第1面1溝断面
(南東から)



3. 第1面
4 (右) 5・6溝断面
(南東から)

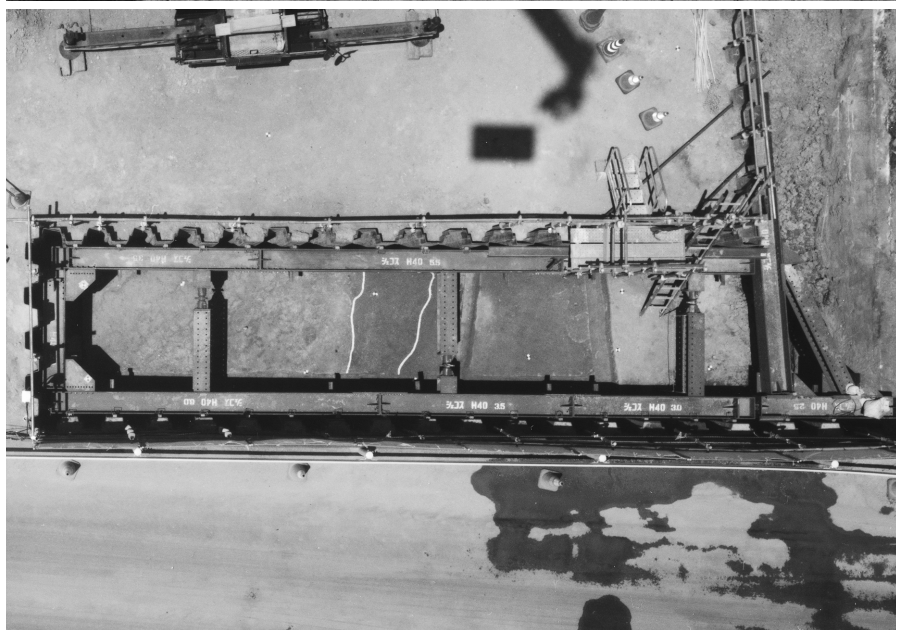
1. 第1面土層観察用畔部
(北西から)



2. 第1面8溝、9土坑
(東から)



3. 第2面全景
(上が北西)





1. 第2面全景
(北東から)

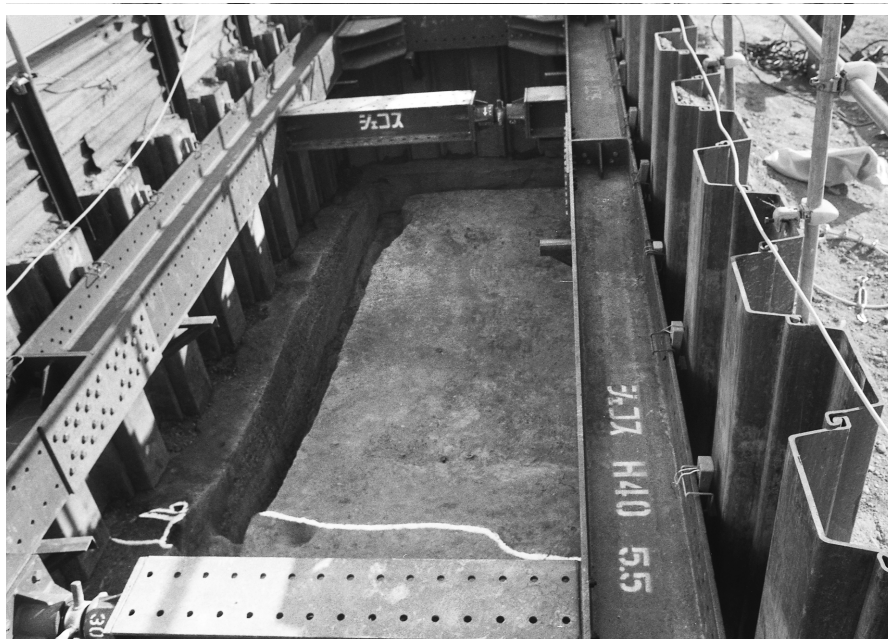


2. 第2面北東部
(西から)



3. 第2面
15(左)～18溝断面
(北西から)

1. 第2面土層観察用畔部
(北東から)



2. 第2面土層観察用畔部
(西から)



3. 第2面
22・23 (右) ピット、24 溝
(北西から)

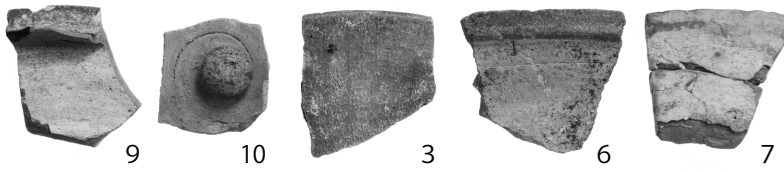




1. 第2面南東壁面
(北西から)



2. 第2面南西壁面
(北東から)



3. 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すいたそうしゃじょういせき きゅう							
書名	吹田操車場遺跡9							
副書名	吹田(信)基盤整備工事(墓地造成工事)に伴う吹田操車場遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第240集							
編著者名	岡本 圭司							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2013年9月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
すいたそうしゃじょう 吹田操車場 いせき 遺跡	すいたし しぼたちょう 吹田市芝田町 ちさき 地先	27205	73	34° 46' 32"	135° 32' 14"	2013.5.1 ～ 2013.5.31	37㎡	吹田信号所 基盤整備工事 (墓地造成)
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吹田操車場 遺跡	生産	中世 近世	溝、土坑、ピット、 落ち込み	陶磁器、瓦器、土師器、須恵器				
要約	吹田操車場 遺跡		今回2面の中世以降と考えられる遺構面とそれらに伴う溝、土坑、ピット、落ち込みを検出した。両面で検出した耕作に関連すると考えられる溝は30°程西に振りながら南北方向に走るものが多く、これらは当地周辺に展開する嶋下郡南部の条里地割がN-33°-Wをとるとの考えと合致する。					

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第240集

吹田操車場遺跡9

吹田(信)基盤整備工事(墓地造成工事)に伴う
吹田操車場遺跡発掘調査報告書

発行年月日 / 2013年9月30日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号